特 260
227

4子260
227

秋田郷土會刊行

大正二年より同十五年迄斷續十三年間、事に感じ、物に觸れ、時事、生活、心事を萬葉に倣はず、現代に染まず、新俳諧歌と稱し、俗談平話を以て赤倮々に歌ひ出てしもの、加藤蓼洲子の勸めに應じ、印刷に附し、公表する事になつた。

昭和辛未秋晴まつかげのやに於て

安藤和風

和風歌集

裸

安藤和風作

知らぬ力

偽りにあらず、男の誇りとは、其の強き事、
其の力ある事。
弱いもの苛むる男に抵抗ひて、覺めたりといふ女憐れむ。
さりながら、女の武器を執る日には如何に厨の淋しくあらなむ。

「妻死なば」などゝ思へども、死なれても、困ると思ふ藥勸むる。

小兒ばかり產む事の外、米の値の高きを歎く妻の皺ばむ。

如何に强き心をもても儘ならぬ、知らぬ力の恐ろしきあり。

其の力、世をも滅ぼし、人をも殺し、草をも生かし、花を咲かしむ。

三人の眼の注ぐ皿の中、一つの菓子に心僞はる。

先づ死なざりき

時計掛けぬ家なし、持たぬ人もなし、歌詠まぬ人なし、讀める歌なし。

旅に寢て、勿体ないが、母よりも、小兒の次に母を夢みる。

岩崎の婿となりたる夢覺めて、寢返りを打つ藁布團の香。

飯了へて、「先づ死なざりき」といふ癖の叔母も果てけり二十年も前

行き抜けて、振返り見る髪、着物、女の眼背なに着けかし。
喧嘩する間は同胞(はら)、喧嘩せぬ日は途の人、喧嘩せよ子等。
彼の女、人の物とは知りつれど、ときめく心我に叛ける。
男なり、勝つも負けるも相撲取の、裸と裸、力と力。

小さき戀

世の中に、生きて甲斐ある男とは、敵多き事敵強き事。
大なる自然の敵と、人の敵、心の敵と戰はんイザ。
腹の底、どん底の聲張り上げて、女乍らも泣く兒、強い兒。
「聲よくば歌はんものを散る櫻」芭蕉の翁はオッな事言ふ。
蒼天に、魚淵に浮き、爺は山、婆は洗濯、桃源の村。

造り花、飾りの旗の美々しきに、人の死悼む涙乾けり。

死や、生や、有罪、無罪、法の庭、人の子裁判く人も人の子。

俎の上に載らじと刎ぬる魚、押へ難なき生きんとする心。

白魚の腹に宿れる小さき戀、執るに忍びず一角の箸。

斷崖に立つて吹かるゝ海の風、不圖怖しく巖を踏み締む。

父母の里

飽きる癖、復た萠し來ぬ、發句も飽き、妻にも飽きん、已にも飽きん。

神經の鈍ぶり行くとも疑はる、惡ごい色の花を愛づるに。

室を出て、向ふ吹雪の面を撲ち、ストフに緩みし筋力の張る。

妻を得しより來ずなりぬ彼の男、途にし逢へば髭などを剃り。

旅にして、飴賣る笛のしみ〳〵と、戀へし事
あり、父母の里。
己が吹く笛に心を奪はれつ、呼べと答へず、
飴賣の行く。
黑雲の鎖す半年、北の國、晝の光よ、寒けれ
ど雪。
戯談に紛らして云ふ腹の中、男らしくもなき
男かな。
平凡の臙脂鉛華も鼻に付く、蛇とキスせし女
戀しき。

生き心なかりき、ハリー彗星の通る日の事想
ひ出せば。

罪の夜の町

ローマ字で書いてよこせし妹が文、綴りは違
へど心讀み得る。
時しあれば、世をも燒かなん心の火、酒と女
に燃えんともせず。
「人間の本性如何に色と慾」井上博士少し覺め
たり。

叱りけり、潔きに似し卑怯さを、受くべき金を受けじとする心。

趣味などを唱へし男、此頃は雑誌も買はず、小金貯め居る。

注意人物と會話せし女、姓名を訊かれ、菅野須賀子と答へしと云ふ。

同じ年、己が娘を想出し、罪作るかに驚いて避く。

春の月、ノートルダムの塔黒く、怪獣覗く罪の夜の町。

ひた〳〵と段階を洗ふ春の潮、ゴントラ遠くマンドリンの月。

冬四月戀しき土を踏まざりき、片解雪に青草を見る。

甘へんとする心

トラピストで作りしバタを贈られぬ、罪深き身の封切らず置く。

カトリクのマリア、禪家の觀世音、異性を欠いて僧も生きられぬか。

男の子、生れしと聞き、敵一人殖ゑしと恐る
労働く社會。
人の憂ひ求めて忍ばんとはせねど、己れ助か
らねばならぬ事あり。
「否」と云ふ言葉に籠むる力ほど強きものなし
言ひ切る男。
二十年連れ添ひ來りし妻の顏、フト想ひ出し
フト忘れけり。
我が妻の我を信ずること厚く、嫉妬のなきも
物足らぬかな。

女こそ僞りものよ、否、弱きものなればこそ
僞りもされ。
幼名を呼び馴らされし母の前、甘へんとする
心ともなる。
屋根は落ち、家も摧けん、おどろ〳〵、頭の
上の雪辷べる音。
二股に流るゝ水の中の洲に、一日消えぬ春の
雪見る。

惡あがさ

戰はんに、餘りに弱き者の聲、そを藝術といふ、美き名得しかな。

裸体畫に見馴れて、子等も怪しまず、神樣といふ、叔母樣といふ、誤りは賢き人にもあるものを、かばかりの事などゝ過まつ。

手紙書く事程厭な事はなし、書けば亦書き盡されずして。

親と子の考ひ、古く、新しく、互み代りに訴ひに來る。

子供等に交じりて遊ぶ惡あがき、小兒らしゝと妻が罵しる。

袖土產熟睡せし兒をゆすぶれば、母よと泣いて乳を求むる。

酒の氣に驅られて登る段階子、醒めかゝりけり、登りつめぬに。

握る手の熱きは情の激せしか、病める處のあらざるか、若し。

二人ある我

行き戻り汽笛悲しき板屋趣、不安の眠り覺め勝に過ぐ。

スワ事よ、不意に止りし汽車の下、人を轢きしと聞いて悲しむ。

汽車の夢、驚かされし窓の外、山火擴がる國境の山。

發句などを作りし男、親となり、子の歌詠むを憂ひて止む。

彼の男又來りしか、金の事、言はずして去る憐れむべくも。

唯父の命ずる儘に嫁きたる、娘果して親に背かず（長女）

若き心失ふまじと、孫あるを、秘して知られし、アルバムの寫眞。

死ぬ程に戀へし女に二十年、男の誇り遂に明さぬ。

飛ぶ夢も地にすれ〳〵の二三尺、心の翼高からぬかも。

二人ある我に逢ひけり古雜誌、若き血汐の燃え立ちし歌。

大發見

彼岸會の、佛の前に、爺婆が、覺めし話しも乾干びにけり。

女なるものを、底より知り拔いて、ときめく事ある心解せぬ。

人の顏見て妙な事想出し、敬まふ心頓みに失せたり。

彼の男、器の如く妻を選み、選みからしを貰うて悶ゆる。

產土神を拜む後ろに、友の聲、大發見の如き驚き。

「婚約を破ぶるの記」など書きし男、引きずられ行く其の黑髮に。

僞はらぬ人あり、正直正太夫、赤裸々をも恥ぢぬ戀說く。

笛の音を聞けば、魂しゐ醉へる如と、蛇にも似たる宿世怪しむ。

搔きむしる心の底を、三味線の、物言ふ人より生きて悶ゆる。

暗き灯

働いて自ら喰らひ、親と子を養ふ外に誇りとてなし。

心狂ふか、重き病に臥しもせねば、驚くべき程平凡の世や。

矢も楯も溜らず、旅に出で見しが、十日經たぬに歸家たくなりぬ。

乘換の汽車待つ宿の暗き灯に、足るか足らぬの旅費を調ぶる。

三言、四言、言ひ爭ひて後言はず、互に思ふ別々の事。

雪解道、沸き出る土の赭き色、陽氣の發する處嫌はず。

晝の灯の斜に屆く軒の端、雪消し蟲の群れて春く。

柳手にたぐり寄すれば舟の艫、岸を離れて沖につん出る。

やけごの痕

只一本殘りし函の卷烟草、　命の如く燃え行く
惜しむ。
群衆に押さるゝ朧夜の町に、　人の燻らす烟草
得ならぬ。
醫者に驅ける、　夜道を背なに何者か、　負ぶさ
る如く重き歩みよ、
恐しき力に引かれ死ぬに行く、　男女よ甘き夢
に憧がれ。
豫言者は生れし里に容られず、　やけどの痕を
妻も怪しむ。

胎内の兒と、　乙見兒と、　亦生存の爭ひ悲し、
乳足り、　足らぬ。
夜を降りて、　朝に霽れ行く畑の雨、　滴り乍ら
桃の花咲く。
人心底より溢る眞泉の、　あつき情けをけふ汲
みて知る。
物言はず勸むるまゝの舟に乘り、　助けられし
を憎む人あり。
花に來て肩に止りし蝶一つ、　市會議員となり
し其の如と。

雲一片

政治家の鹿爪らしき嘘を言ふ、顔つく〳〵と笑ひたくなる。

三成を容れざる加藤も、福島も、家康にも亦容れられざりき。

軟かき草に寢轉び、空を行く雲一片に心載せつゝ。

坐りたる跡あり〳〵と披し靡き、匂ひやかなる春の若草。

足袋脱いて、若草踏めば快き、頭の熱も頓みに忘れつ。

禁厭も、藥も利かぬ齒の痛み、勞はる妻子も賴みなく思ふ。

商賣に慣れて女の戀知らず、父の樣なる男に媚びる。

「子を產まぬ父は、何故親なるか」と智利伯西爾を知る子質問ぬる。

我名の響き

急がるゝ電話待つ間のもとかしさ、下らぬ話しに長き女の。

そゝくさと秘密を話す電話口、仇なる人に聞かれしを悔ゆ。

呼ぶ人の出て來ぬ電話の混線し、妙なる樂に暫し聞惚る。

我が思ふ事を書かれし人の文章、人に後れし心を叱る。

春の川溢るゝ岸の草搖らぎ、艪を漕ぐ浪のうねり〳〵と。

山崩れ、里埋むとて二三日、暖か過きぬ、花悉く咲く。

朧月、男女のさゝやきに、我が名の響き胸を躍らす。

古里の頻りに戀し、一節切、身は古里にあるを忘れて。

オモチヤ屋の前に來りて止まる足、「子供の爲」と云ふて物欲し。

武士の顏にも疵の殘る如、世に立つ人の名も完からず。

恐しき崖

戰ひは子等の上にも見る悲し、試驗に苦しむ小さき頭。

カンニングせざるを誇る子も逢はん。親の樣なる運命の數奇。（長男に）

いと弱き我をも強くならしめし、求めぬ敵に敵とされつゝ。

人の爲め、心ならずも戰ひて、人の憎みを我に集むる。

生活の上より覺めし叫び聲、悔るゝくもあらぬ長髪。

恐しき崖に女と共に立ち、危ふかりける、飛びしさる身の。

生れたる其の嬉しさを知らざれば、死ぬる恐れも斯くあらなんか。

一杯の水にも貴き價あり、否之を得し人の力よ。

白き黑き赤き心

死も斯くぞ、眼既に閉ぢて、耳に猶ほ蛙の聲の遠ざかり行く。

「妻も子も飢えてや死なん我死なば」と云ふも亦命を惜めるか。

若き人の死を恐るゝは、老人(としより)の戀を夢むる事の如きか。

白き心と、黒き心の鬪ふを、赤き心に復へりてぞ見る。

花載せし車ゆら〳〵晝の町、止らんとして止り得ぬ蝶。

キラ〳〵と春の日光る砂畠、撓れて伸び立つ麥の勢ひ。(土崎追分間)

雪殘る男鹿嶋山の影寒み、風荒浪に春早き湖。(八郎湖畔)

野の末の煙突低く立並び、空に消え行く烟長閑に。(機織にて)

河一つ隔てゝ霞む家萬戸、身は草に寢て雲雀嬉しむ。(同 上)

酒飲んで、毒にもならぬ氣焔吐き、快しとする人を羨む。

恐れず戀せず

「花咲かば」などゝ待ちたる花咲けど、何やら知らず、心足らなき。美しく咲きし櫻の花の下、あたり見廻はす心恥かし。

菜の花の黄金輝やく夕燒に、咽ぶが如き香を厭はしむ。

なまじひに知りたる人と汽車に乘り、歌思ふ心妨たげられぬ。

妻にのみ語る事あり、友にのみ明かす秘密も少しは持ちぬ。

怒ることなしと言はるゝ人心、波をも立てぬ淵に臨む如と。

誘惑と知りつゝ自然も面白き、香にも醉ひつゝ、色に醒めつゝ、

人と云ふもの、餘りに深く知り拔いて、遂ひに恐れず、遂ひに戀せず。

苦しとも思はざりけり病みし時、死ぬべかりしと聞いてをのゝく。

其の儘に死にもやせんと二夜三夜、寢ぬ事あり き、夫れを病に。

我　二　つ

日に三度箸取上くる膳の中、又食はされし妻の好くもの。

後添の醜きをも厭はずと言ふ、顏を好みし男なりしが。

顏と共にすさみし心隱くし得ず、白粉燒けに裝ふ笑ひも。

閨を出て睡りの足らぬ瞳れ瞼、扱帶(しごき)姿を恥づる海棠。

花は實になるを急ぎて散るものを、さもあらばあれ、人の惜しむに。

「我死なば誰を主じに櫻花」と思ひつゝ植うる鍬把る。

瓶に挿せし青菜一莖花になり、蝶を思へり、野をも思へり。

時に世を超えて考へ、時に世を避けて味はふ我もある我。

菓子と眼鏡

善しと云へば、惡しゝと思ひ、惡しゝと言へば、善しと考ふる、我僻めるか。

幾ら〳〵論じて見ても煮え切らず、君と僕との立場違へば。

花咲けばさへ心足り、花見んと思ひもせざりき、花も見ざりき。

「有りやうは我も花より團子かな」團子の外に何かある筈。

花は植物の生殖機と知るからに、美といふものも夢にあらずや。

亡き父の好みし櫻祭らんと、酒を濺けば色に浮き出る。

雜草の如くに生れし髭を剃り、花見顏にもならんと入る床屋。

五日毎髭剃り呉れし監獄に、在るにも劣る忙しきかな。

疲れたる頭に觸るれば眠うなる、髮刈るに行かん、居睡るに行かん。

剃刀を若し喉元に過なば、如何にやせんと假寢より覺む。

笑ふ時大に笑はず、笑はざる時にも笑ふ――日本の女。

人形の如くに男に弄ばれ、赤いべゝ着て女喜ぶ。

妻といふ者あり、下女と娼妓とを兼ねて、時々我儘を言ふ。

棺桶の中から脱れ出てなんと、苦しみもがき覺めて汗かく。

菓子と眼鏡「自然」に賺されする藝も人猿を距る事遠からぬ哉。

ルッソーの懺悔錄一卷借れて讀み、身にも冷たき汗の出る覺ゆ。

時に我、我を離れて我を觀て、我にもあらぬ我を求むる。

浪華節

浪華節、蓄音機と共に下落せし、武士道の爲め泣かんかな我。

閥族打破、憲政擁護も、浪華節となりもやせんと思へは悲し。

君に問ふ、太平洋の浪騒やぎ、大和嶋根を洗はずや否や。

乞食癩兒の手をも經し、金ほど汚なきものはなし、されと其の金欲し。

能く人を誤解する人、其のうつは、人をはかるに餘りに小さし。

茶を飲むにござれよ、生きてゐる内に、葬式杯に來て呉れなくも。

其のうなり惡魔の如く、自動車の乗らざる人を呪はんとする。

鳴く蛙、枕に近く又遠く、自然のリズムに誘はるゝ夢。

堀の水青まんとする香を送り。軒端近くに行々子鳴く。

青葉若葉生きなんとする心と心、共鳴りをする人に快き。

默笑

文字言葉、言ひ題はされぬ此の冥想、默して笑めば人の怪しむ。

生きながら神に祭られたくもなし、されと獸となりたくもなし。

皮に毛のなきを人とし云ふを得ば、心の牙を何といはまし。

他郷に學ぶ子より又來し郵便の、封切らぬとも金の事ならん。

手鞄を提げていつもの憎き顏、血の出る稅を搾り取らんと。

生活に疲れし夢も結ばぬに、工場の汽笛明易き聲。

窓に迫る青葉若葉の影濡れて、筆のにじみを厭ふ書き物。

乳頭梅

能く話せば、能く解かる男にて、他人の話しに人の氣になる。

悉く知りたる事を隱くし立て、掩はんと苦しむ人を憐れむ。

繕ひを言へば言ふ程綻びて、見え透かさるゝ
汚なき心。
人立ちし後に殘りし菓子撮み、犯せしと思ふ
大なる罪。
我れ既に十年前に言へし事、博士の口より新
らしく聞く。
同じ時、同じ處に日毎逢ふ、女なりけり、友
の新妻。
八人の妻を殺せり、或る男、行ひ正しく、守
り固きに。

人の子のすばしこかりしを厭ひつゝ、我が子
の鈍ぶきさがを憂ふる。
梅散りて乳首の如き實を結び、酸きもの好む
女立寄る。
山躑躅夕日に赫やく影落ちて、藍より青き水
も燃えんとす。
杜鵑にてありしか、無かりしか、寢覺の耳に
殘る何やら。

蟲燒き

米の値高きを歎く妻の前、天下國家の財政を説く。

生中に文字など知りて金貸となりも得ぬ身の甲斐なきを怨む。

子の學資引けば殘らぬ收入の、今年もインバネスを買ひ得ず。

一二週病など得て、身の閑を味はんと思ふ、忙はしさよ。

偶々に病を得しが、懷中の淋しかりせば、温泉にも行かれず。

山を距る半里の町に閑古鳥、閉ゆる時あり、日曜の晝。

外風呂に長湯をすれば杜宇、温みし聲に風邪引きし心地。

退職の年給に食む人老て、苹果の畑に花の虫燒く。

鮪さく男

經典の餘り立派に出來過ぎて、行はれざりし事を疑ふ。

若き日の力を金にのみ用ひ、樂まんとして人既に老ゆ。

鮪割く外に能なき男なりしが、妻を持ちしと皆が笑ひぬ。

金持と、みめよき兒には、先生も能く敎ふると貧しき子が言ふ。

泥に塗みれし、貧乏人の子を起して遣りしに「此の叔父さんが倒せし」と母に訴ひぬ。

晝日中、遂ひ通られぬ藝者町、色氣も未だ失せざるか我。

決して〳〵、彼女に惚れては居ぬ、されど心を離れぬは何せ。

妻もありし、子も亦ありし、と顧みて戀せんとして遂に戀せず。

此のきづな、遂に斷たれぬ惡緣の、手かせ足かせ子供六人。

折々に夫婦喧嘩をする事も、使はねばならぬ金の有る無し。

臺所は、妻に任せて、米の價も知らずに飯のよしあしを言ふ。

うまき魚買ふ錢なしと言ふ妻に、有らば料理屋に行くべしといふ。

初蚊帳

銀行で字の書き樣など直されし頃、借金もなかりしと母常に云ふ。

誇る顏見せ付けらるゝ苦しさに、人のもてなし受くる厭はし。

人に金拂はせて、そとふところの財布押し込む顏を忘れず。

不時の金手に入りたるを妻に秘し、見付られたる衣疊む時。

瀨戸物屋の前を通りて立止り、ステキで壞はして見たし、坐ろに。

大臣を土偶の如くに言へし男、知事に訪はれしを誇り顏に語る。

初蚊帳を嬉しみ、早く寢ねたるを、珍しき友來て起されし。

方丈の庭より起る山續き、香の火絶えて閑古鳥聞く。（林清寺）

子ちやものの

敵の時惡るい人とのみ思へしが、味方となれば善き所のみ見ゆ。

大臣や、博士や、女優も己が手に敎へたりしを老敎員は誇る。

人々は空しき聲に疲れたり、求めんとするたなそこの物。

洋傘も疊めば杖につくべかり、男とならんとする女は……。

何人に、何の事にと云ふ事なしに、不平絶えねば心も老いず。

堪え難き齒病みに神の助け呼び、可笑しも可笑し、痛さも痛し。

左うした女に受くる媚よりも、けふ早乙女にからかはれて嬉し。

草花を植うる心を起せしは、二た月ばかり妻の居ぬ時。

子に甘き父と言しる吾が妻の、腹痛めざりしや可愛からずや。

父死ぬも、まさか乞食もさせまじと、妻にさゝやく作も弱し。

茶碗にも壊はるゝ命あるものを、痛くな叱りそ、子ぢやもの妻よ。

南京米

偽らぬ心の底を歌へしに、心にもない事を云ふと言はるゝ。

人二人逢へさへすれば、米の値の高き安きを喇つ、淺まし。

米の話し、南京米の話し出で、喰はない事を云ふに恥かし。

一生の思ひをなして、我が妻が、買來りしといふ、南京米一斗。

「南京米を喰べさせるとて、おつかさん、矢張りおまんまぢやないか」と子供等は訝かる。

新聞の切抜すれば、賣る時の價が減ると、妻が悲しむ。

子を産むに生れし女を孕ませて、始めて知りしやうに驚く。

氣が拔けしやうになりつゝ、身まかりぬ、婆失へし爺も間もなく。

藁布團

何と云つても、金貸に優さる商賣はなし、されど、金貸しの心とならんに、餘りに氣弱し。短日を燃せる瓦斯の青白く、勘定合うて錢足らぬ顏。

七人目の子はなくもがな思へしに、六人の子に增して可愛ゆき。

醉醒の水にも增して快きに、癖になりたる轉寢の夢。

生中に妻が掛けたる搔卷に、昔しの夢が覺めて風邪氣味。

其の女、人の物となりしと聞き、心の古疵うづくかに痛し。

衣脫いで、裸になりて、命まで、任せて安すし、藁布團の夢。

無理に金を手に握らせて、につこりと笑はれし時、身振ひをせし。

つちくれの如くに金を叩き付け、ア、愉快なり、併し乍ら惜し。

氣の毒さに、顔を赧らめしにもあらず、死ぬ程欲しき金を辭みしを恥ぢ。

金よりぞ変り破れん、友達に金は貸さじと或友は言ひぬ。

いかにして、友の務めを盡すべき、金のなければ救はれぬ身に。

拾圓の金に困りて死せし人、貸すべかりしと人皆が言ふ。

餘所行きの顔に寫せし友の寫眞、ふだんの君にあらぬ疎まし。

米屋、薪屋にのみ支拂ひて、料理屋に拂はぬといふ妻も利己主義。

藥より強し

強いと思つたのは、力んだのであつた、弱いのであつた、ブル〳〵とふるふ。

詰らない奴が能く愚痴を言ふ、歌なども夫れに似たもの、同じもの。
白人臭き書を書けば、歌を言へば、夫れ新しといふ、皆が眞似する。
妻急に倒れて醫者を呼ぶにやる、病にあらず疲れなるべし。
妻に代る母も疲れて「下女の如し」と呟つ、我も「子守にあらぬど」と幼な兒を抱く。
むくと起きて箒を執りしが、病める妻、「寢ても居られぬ」と言うて倒れぬ。

「ア、生きるか、死ぬるかの外に、病ひもされぬ哉」と亦立上がる。
病にも遂に勝てりき、藥よりも強きは生活と
闘はんとする心。
我が家の油減らして、人の山の寶堀りしを壽かんもうし。
三錢の短冊に我の歌を書かせ、一文の價なくして彼は歸りぬ。
十錢は二錢銅貨の五枚なり、されど五拾錢銀貨も二錢に使はるゝ、闘の世の中。

危ふき心

筆捨てゝ見に出る活動の町廻り、小兒心をそゝり出されし。

筆援つて、ふと忘れたる字を思ひ、耳を通はす地築つく唄。

若き時、女とひとつ部屋に臥し、寢られざりしを思へば可笑し。

「君なれば安心なり」と女一人の坐敷に待たせられけり、危ふかりけり。

子は可愛い、吾が子は可愛い、灣泊な末の男の子は尙ほ可愛い。

又藥、醫者にと走しる思ひせば、皿壞しても子に惜しくない。

送る遣る苹果のやうに紅き頰もて可愛いから う、逢はぬ我か孫。

人の言ふ、孫は子よりも可愛くば、子を何とせう、孫に逢つた時。

初孫に逢ひもしたいが「おぢいさん」と呼ばれたくもない、逢ひたくもない。

鈴のやうな涼しき眼を持ちし姪に、ふと失へり、叔父といふ心。

底なしの深き油の湖黑し、烈しき臭ひ醉うて落つべく。（黑川重油タンク）

地の底の割れて噴き出す油井戸、火を誤たば世も滅びんか。（五號井）

草も木も染まる油の黑川と、名付けし昔しのけふもありけん。

倒れ死ぬまで

「おぢいさん」と始めて呼ばれ恐しき宣告を受けたやうに戰く。

死にたくはないと、明確な意識ある內は、死ないい、死なれうものか。

六人の小供小さし、老いし母、殘して死なれぬ、藥喰しよう。

米の生る田もなし、金の山もなし、稼かにやならぬ、倒れ死ぬまで。

死なれまい

首巻の深き思ひに沈みつゝ、自動車過ぎし後を驚く。

自動車のベルも鳴らさず、ハンドルも取らず進んで見たいとも思ふ。

靴買つて、マントを買つて、と子はせがむ、妻は暮されぬと、月給をいぢる。

お母さんだつて、新しい着物を買うでなし、米屋を拂へば薪屋が殘る。

米安くなつたが、高い時曲げた冬物出すに夏物も入る。

腹の底、讀まれた事も悟らずに、鹿爪らしき面を見てやれ。

俺が死なば、喜ぶ敵が多からう、意地になつても死なれるもんか。

俺を呪ふ敵は、敵にも味方にもあると思へば可笑し、恐ろし。

「死なれない」とむくと刎ね起きた床の上、「何うなすつて」「何に其の夢を一寸」。

土よりも髭をいたはるあいつらが、村亡び行くも悟らぬか。

石臼

妻子から離れて一夜旅枕、何う寝て見ても寒い絹夜具。（能代にて）

清らかにあれども宿の借寝巻、襟むづかゆく覺め易き夢。（同上）

人妻は紅粉白粉を顔に塗る、ひゞの藥を我が妻は燒く。

母の氣に、なぜ入らぬだらう、血を分けた孫であるのに、仇敵のやうに。

其の孫の夜を戻らぬ雨風に、捜がすに出てた人は其の母。

夏羽織一枚借れて行つた限り、死んだか、生きたか、音信づれぬ友。

石臼の下に命のあつた兒が、死に損ねてと語る老人。

迷うては山にも入つたが、悟つては里にも歸つた釋迦を憐れむ。

若返る悲しみ

針のやうに雪に突つ立つ青松葉、顔向けられぬ吹雪交じりに。

なまなかに、雪が積りて、仲悪しき隣の村へ近き道付く。

大なる足跡辿る雪の原、怪しき人に追ひ付いて見よう。

淋しさに、堪えぬことある、別れたる妻思ふかに、止めし烟草を。

起きるから寝るまで、働き且つ怒鳴る、七十近き母の健やか。

既に錢預けぬ妻がこつそりと貧しき人に恵んだとやら。

己れより古き頭腦をもちし子の教育を疑はずにも居られぬ。

茶碗にも魂しゐがある、怒りたる心で把れば跳ね返りする。

書き物も、讀み物もなく、寝たくもない、遣瀬のなさに餅焼いて見る。

進みたる友を追はんも快からず、若返らねばならぬ悲しみ。

選舉

夜遲く、我が足音を聞かぬ内、眠り賜はぬ、
母の厭な選舉近づく。
復た選舉に掛らねばならぬかと、顏にさと曇
りのかゝる母親。
劍太刀交ふる戰さも、選舉も亦、男の仕事と
母を慰む。
正直な巳を煽(おだ)てゝ、戰はせて置て、手を拍つ
て笑ふ人が憎い。

此の弱い俺が戰はねば、戰ふ人がない、戰は
にやならぬ。
憎まれて役になりたくもないが、皆が好い人
になりたいので、己むを得ないのだ。
あれが候補に立つたのかと、賤しむ心と、妬
ましき氣にもなる。
大蛇、兩國と、面白半分に、最負する人が羨ましい
俺は井上さんの爲に、命掛けに掛らねばならぬ。

宿業の蛇

死ぬ事と、選擧運動程、嫌ひはない、そして離れぬ宿業の蛇。

戰爭ひに死ぬべく子には勸むるも、決して選擧運動をさせたくはない。

人を疑ひ、已を欺き、心を腐らし、腸を汚し選擧運動程穢らはしきはない。

妻は米屋、薪屋を說き、母は神佛を祈り、一家擧つて運動を助く。

清き札、一枚我に賜はれと、乞食のやうに門毎に訪ふ。

負けて悔しい程、勝つて嬉しくもない。只清き仕事を爲し了へし快さ。

伴と娘は、辛くも落第を免れ、かついだ代議士は當選の春。

十人のまどゐの中に、誰か先に死ぬであらう……若しや俺では……オ、いやだ。

せつかちに、怒りぽく、腹にある事を隱さぬ性の、益々母に似て來る。

鳴き立てゝ追ひ來る鶯鳥を逃れ避く、軒端に梅の白き一枝。

紅燈綠酒

人の顔見て、料理屋も、特に庖丁の冴を見せる献立。

動かざる山の如くに居据りて、笑へば巖も崩れんとする。（土田萬助君）

平生程の氣焔揚げぬも、時折に挿む皮肉の舌鋒は鋭き。（北原鶴城君）

酒の氣の燃ゆる言葉に熱を帶び、俳人らしくも見えぬ熊髯。（佐々木北涯君）

知事さんも、我々も、酒を飲めば醉ひ、女の事を言へば喜ぶ。

馬鹿な事言ふなと言へど、此頃は、若い女が目に付いてならぬ。

扇手に舞ふべく立ちし身の構へ、斬込む太刀の隙間さへなき。（小富）

立つて舞ふ、姿氣高く、平生よりも、顔清やかに、美しさ増す。（同上）

躍らざる藝者のあるが物淋し、蝶の羽がひを傷めし悲しみ。（小時）

故郷に居て、外に故郷でもあるやうに、歸りたく思ふ、追分聞けば。（お政）

鏡

（床屋にて）

大なる床屋の鏡に、我か顔と、始めてお目にかゝりし心。

つく〳〵と、鏡に映つる我見れば、他人らしくも嘲笑ふ顔。

苦がい顔作れば、苦がい顔をなし、鏡の俺れを馬鹿にして居る。

今少し、好い男にてあつた筈、鏡が惡く出來たでないか。

幾ら鏡、見てもならない好い男、吐息をつけば、つけば曇れる。

指先に、鏡の曇りいぢくりて、書く氣もなくて、出來しへまむし。

髪を刈り、髭を剃れば、少し人らしく、鏡に映つる價拾錢。

鏡をば、床屋の外に、見た事のないと云ふ人白髪氣にする。

前にした鏡に、女の美しき顔が映つれど、後ろ向かれず。

忌々し職人と甘い話しゝて、時々鏡に秋波を射る。

秋田は

秋田は金の出る國、油湧く國、他國の人に儲けらるゝ國。

秋田は海に沿ふ國、七十里の海に、舟のない國、魚のない國。

秋田は山の國、木の國、植ゑた林を、官に取られし國。

秋田は田の國、米の國、米の外に農業を知らぬ國。

秋田は金の國。金貸の國、金貸の外に事業の起らぬ國。

秋田は蕗の國、否筆の國、三文々士の鉢合はす國。

秋田は理屈の國、屁理屈の國、理屈倒れに損をする國。

秋田は酒旨き國、女美き國、人らしき人の出ぬ國。
秋田は篤胤の生れし國、信淵の出でし國、大臣の出來ぬ國。（當時未だ町田、田中兩相野に在り）
秋田は寒き國、雪の國、蛇蛙のやうに、半年を寢て暮らす國。

八人目

貧乏を歌へし詩人も、酒呑めば、女を見れば惡い顔せず。

男を男とも思はざりし女、人に圍はれてから小さく隱くる。
四十路越しに、醜くなりし我が妻の、八人目の子を孕む悲しさ
恙なく生れぬ、雄々しき產聲に、車引いても男の子頼もし。
小兒のみ產むより能なき妻の、芝居に遣らぬに不平は言はず。

死なぬ喜び

外孫(まご)よりも、小さき小兒二人殖ゑ、死に抵(いた)る迄稼かにやならぬ。

末の子はわきて丈夫に生れけり、親に別るゝ事早しとや。

死なぬ内に、短冊一枚書いて欲しと、云はれて驚く、五十路過ぎし男。

我老いぬ、健やかなりし彼も死に、貧に苦しめど死なぬ悅び。

臼轉がし

神も賣り、日蓮も賣る、筆に口に、田もなく金もない彼等。

日蓮を賣物にして儲けたる、彼一倍に上人が有難からう。

「金儲秘訣」など買つたものよりも、賣つた男が金儲けたとさ。

小西さんが死んで了つた、世の中に神も正義もないと疑かはれる。

さうでもない、知るも知らぬも、哀しまぬ人のないのが、生きて居るのだ。

「冗談でないよ、米代にも足らぬ薄給、木でも石でも嚙まにやならぬ」といふ。

鼻の下に、無用ぬ髭生やすより、空地に桑でも植ゑれ汝等。

「繪の樣に列らんで美しい鴛鴦の戀」野蕗生さんの屏風に題す。

不足なき家に生れて、美しき不平もあらう、歌となつて消える。

夫婦して、臼轉がして來る雪の上、逐はれたと思つて、鷄が逃げ鳴く。

平洲追悼會

萬人に惜まれて極端な不幸に死せる

今一と目、生きて花咲く春にも逢はず、君が極端な不幸を悲しむ。

申上ぐる言葉もないといふ事は、君を弔ふのみに相應はし。

悟りたる君さへ、遂にかゝるとは、よも想ふまい、と思へば悲し。

故郷に來て歸るべき家もなく、寺に宿借る遺骸寒く。

イヤ死んだのではないのだ、人の爲め、殺されたのだ、と云ふ聲ひそむ。
天道の是非を疑ふ人々の出でしも、君を悲しむ餘りに。
此の人數力戮せて救ひなば、助けることの出來なかつか、噫。
ふと君が此所のまどゐに居るとのみ、思へば空し香の烟よ。
始めより、追悼會の終りまで、ハンカツ放さぬ人は未亡人。

藝者等も、矢つ張り同じ人間だ、弔辞を聞いて皆泣いて居る！。

堅き餅

祭らるゝ人に誤り算へられ、生きても死せる我を憐れむ。（舊自由黨員の催ふせる幽明會に我が名の顯はれ）
薪乏し、炭は高し、と云ふ年に、寒さ烈しく雪は降る〳〵。
十人の家族の外に、妹の家族も交じり、米の價高し。

霜を置く、我が頭より妻の齒の、疎らに落ちに寒きほゝゑみ。

一人りよりなき母親の健やかに、七十越しても堅き餅嚙む。

汽車後れ、郵便は來ず、電報を待ちて新聞作る寒き夜。

約束の時間も過ぎた、うるさいと、電話口に立てば彼の妓の聲。

工場から、催促は來る、腹は減る、譯す電報意味が通せぬ。

新年に、一度手紙を送らせてと、いふ女あり清き交はり。

さすらひて、今濱松に居るといふ、女も忘れず年賀の手紙。

古時計

實用とするには狂ひ、裝飾とするには、型の古い銀時計。

古妻と共に捨てられぬ古時計の形を離れぬ二十年。

金時計、　強いて買はれぬ事もなし、　書も讀まねば子にも着せねば。

お互に金時計も持たぬゆゑ、　新聞も殖ゑると會計を慰籍さむ。

五十年、　危き世路の崖傳ひ、　蹈み外づさゞりし事の不審議よ。

兄さんが叔父さんとなる、　お爺さんと呼ばる齢にも遂になつたのか。

殘り菓子、　袂に入れて持歸る、　子に喜はるゝ年齢にもなつた。

口癖に、　死んで了へと叱る子の病めば死ぬでもせぬかと案じる。（二男病む）

衛生の理屈に囚はれ、　褌など落し給ふな、　魂しゐまでも。

聲などを曇らせて讀む弔文の、　死人と交しはり深からぬ男。

人形の樣に奇麗な舞妓さん、　路次に袋の煎豆を嚙む。

蛇よりも、　花に狂へる蝶を見て、　アダムも、イヴも罪を作つたろ。

辨當の砂

役人になる資格なし、商人になる金もなし、新聞を書く。物の價の高きが爲めか、子の多き爲めか、益々苦しき生計。富豪に知る人多し、壹錢も無心をしたる事なき誇り。高利貸、質屋の暖簾潜りつゝ、富豪に下げぬ頭も白し。

股引に劣る、袴を着る人の、外米交じる辨當の砂。三枚の煎餅嚙めば、一錢の金の價も石に等しき。四日越し、子も藥飲み、貧乏の神に、病の神も手傳ふ。愚痴なども言ひたくもなし、云はぬとて、樂にもならず、弱い音を吐く。

赤き雪

むら消えの雪より漏るゝ土の香に、草甦へる北國の春。

雪掻きし手に操る筆は顫ひども強き力の文字に溢るゝ。

可愛ゆくも、憎くもあらず、三十年添へたる妻の頭も白し。

時計見る、今年八歳の三男は、學業は劣るも世に働かんか。

三男より、四男の心廻り過ぎ、早く死なぬか夫れも心配。

荷車に運ぶ、屠りし獣肉の、血汐に春の雪降る赤し。

日に幾圓、收入の多き荷馬車引、大道狭ましと通ふる鼻唄。

社長病み、親友は怪我せり、我一人筆健やかに世に憎まる。

人々よ、明治を離れ、安政に近き世來れり、爾か思はずや。

筆も賣る、舌も賣らるゝ、身体をも、靈魂さへも賣らるゝと聞く。

休み日

休み日は、特に訪ふ人多くして、休ませて呉れぬ人の恨めし。訪ひ來る、人悉く何事か、用を頼むに來らぬはなし。

不幸にも、大水の時も、近火にも、來ぬ人迄も用あれば來る。

是非もなや、寺の事まで引張られ、アノ世も近くなりしかと思ふ。

金借せと云はるゝよりも、文字書けと乞はる程の苦しみはなし。

櫟くたく、「先生」扱ひさるゝより、「さん」と呼はるゝ、懐かしきかな。

金貸も、株屋も、痛く罵りつ。窃に勸業債券を買ふ。

抽籤の參千圓を夢みつゝ。米屋の拂ひ心元なし。

味方にも、友にもあらず、我を知る人は、敵にも、遠國にもあり。（答加藤囊君）

只一人、我が文章を見て呉れる、其人の爲め血を注ぎ書く。（同上）

此の病

滿鮮視察後の六月腦溢血の大患に罹り、十月に至るも全癒せず、筆を捨て、絶對靜養せよと短歌を添へ、加賀谷信吉君より勸告されしに答ふ五首。

此の病ひ、咒ふ人のあればとて、君が祈りになどや勝つべき、

此の病ひ、君が遠道尋ね來て、手作りの菜籠にこめし眞心。

此の病してより、來ぬ人、來る人、人の心の奥も見えけり。

此の病、無用の筆を捨つべきに、止むに止まれぬ「文章報國」。

此の病靜かに憩へば癒ゆべきを、憩へば喰へぬ親子八人。

果報者

世に殘る九月一日大地震、無政府主義者殺されし事。

なりはひの爲めか、主義かは知らざるも、大なる名を得て、死にし果報者。

國の仇、殺して、自ら死にもせば、男らしゝと、惜まれにけん。

其の罪を掩はんと、女も子も殺し、罪を重ねし、夫れもつはもの。

門藝人

長い〳〵病にも飽きた、此の分では死んでもよいと思ふ事もある。

酒、女、飲み食ひ物にも好みが失せた、生きて甲斐なき老と病と。

新聞も、雜誌も駄目だ、同じ事書いた書籍にも讀み飽きた。

門附の藝人が來た、細君はニッケル一枚で追ひ返さうとした。

オヽ待つた、モ少し歌へ、出來るなら、躍つても見れと、銀貨をはづませた。

案來節も、切られ與三も、プロ的氣分、眞劍な態度が氣に入つた。

遣る瀨なければ、門藝人も慰めになる、藥代と思つて、又銀貨を足させた。

乞食杯と、さげすむものは、どこのどいつだ、藝は賣るも身体も、靈魂も賣らぬと云つた、言葉丈けでもウイやつ、

一生一度

三十三年同棲せる妻、五十二歳にて、膽石病の爲めに死す。

一生に、一度の妻に死に別れ、此の悲しみを
再びはせじ。
歌俳句、いかなる言葉を並べても、我が悲し
みは、とはに消えせじ。
病む我と、幼き小兒殘しつゝ、死んで行く妻
の憎くゝもあるかな。

嚴かに、冷たき骸眺めつゝ、死せると思はれ
ぬ今迄の妻。
孫二人、泣きつ、笑ひつ賑はしく、不幸の家
と思はれぬ一と時。
心ならず、妻を一生苦しめて、死なれて悔む
男の僞り。
泣いたとて、死にたる人は生きて來ぬ、歌で
も歌つて、紛らかさうか心。
子も歸り、娘も行きて、我が妻の死にしを始
めて知れる淋しさ。

弔ひに、揃うて來る夫婦者、けふに限りて妬しとも思ふ。

妻の墓に、我が名も共に刻ませて、心の仇草萠す恥かし。

憎まれて、仲々死なぬ彼と我、其の子其妻失ひ乍ら。

幸不幸

妻もたぬ人なし、獨り我が妻の死にたる如き悲しみ。

妻死にし、歎きに心奪はれつ、孫の生れし喜びも消ゆ。（今春長孫男生る）

一人殖ゑ、一人減り行く我が家も、新陳代謝の大法を免れず。

病む我を、殘して死せるにもあらず、我の代りに死にたる妻。

「子等の爲め、幸ひならん、我れ先に死なば」といひて死にし我が妻。

生ける内、やさしき言葉も掛けざりし、三十三年連れ添へし妻。

花見にも、芝居にも連れ行かず、怨みしことも、遂になき妻。

此の冬を、出湯に伴ひ行かんとぞ、思ひも遂げず、死なれたる妻。

此の心、生きたる内に一言も、知らせざりしを、悔ゐても及ばず。

生き殘るもの幸ひか、死せるもの不幸ひかに迷ふ悲しみ。

紅い坐布團

年と病には遂に勝たれない、餘寒の床に就く。」

吾と我が、筆見ぬも淋しい、春寒の夕刊。」

齒痛みに苦しみ乍ら、二日二夜、能くも寢入つた、疲れも疲れた。

惡女の戀のやうに、はまれば出られぬ炬燵も嫌ひ。

灌腸も下劑も利かず、針治にて直り掛つた、俺も古い人。

食慾も起らず、便通もせぬ不快でも、筆を執りたい心が止まぬ。

病でも逢ひたいと、勝手な客の來て、勝手な用を頼んで歸る。

痩我慢から起こる病と知り乍ら、痩我慢するか病ひだ。

孫等より、年祝はれた坐布團の紅きに、成程生れ返つた春。

坐はつて見て、馬鹿に嬉しき坐布團に、孫より幼なき心に返る。

人の眞似もしたくない、人に眞似させたくもない、俺等の俳歌だ。夫丈けだ。

泥の力

解けかゝる、雪間の草の青きより、明かに來る北國の春。

雪解道、湧き出る泥の力にも、明かに來る北國の春。

日の光り、木にも人にも輝きて、明かに來る北國の春。

未だ癒らぬ、といふよりも、未だ死なないといふ、病在る我。

馴れ切つた、安全剃刀も、誤つて血を出す事のある、餘寒の曉。

取るよりも、捨てるが多い原稿に、入學試驗の採点など思ふ。

街道で、菓子を頬張る俺の面、見て笑ふ、人の面もをかしい。

新らしき女に、若いトルストイ、名も魂ゐも蹈まれし泥か。

代議士となりしより、利權の味を占め、ホク作る閑(ひま)もないといふ。

戀愛、慾望トテモ難しい言葉だ、昔しの人は色と金と云つた。

宿なしの、猫と猫との戀止めば、厨に食を盗み爭ふ。

我老いて

我老て、友は減り行く、有る友も遠くなり行く、親しき友も。

我老て、妻にも死なれ、我よりも後に殘りて弔ふ筈の。

我老て、子も離れ行く、夫々に、女は嫁き、男は勤めに。

我老て、孫は可愛ゆし、其の孫も、餘所に離れて、見られぬ淋しさ。

我老て、心の儘にならぬ身の治らぬ病を抱く悔しさ。

我老て、未來は近く、過去遠し、只現在の其の日暮しに。

我老て、戀さへ、慾さへ覺め果てゝ、佛にさへも絶る氣もなし。

我老て、何の望みも、樂しみも、無くなりし身の、死にたくもなし。

我老て凡てを忘れ、幼な兒を相手に遊ぶ時のみ樂し。

我老て、生死の悟りも何かせん、草木の如く朽ち行くばかり。

明治四十二年十和田湖に遊びし追憶

山登り盡せば、樹の間に大なる鏡の如く開く湖。（鬱蒼峠）

山もなく、湖もなし、天地(あめつち)の未だ開けぬまゝの朝靄。（觀潮樓眺望）

神よりも尊き人のいさをしは、蠑螈を鱒にかへし湖。（和井内氏功業）

君と親に對する心を

故知らに只有り難き現(うつ)し神、聞きし佛に勝さる二た親。

和風歌集　裸　終

昭和六年十一月五日印刷
昭和六年十一月十日發行
和風歌集　裸
特價金壹圓
著者　安藤和風
發行兼印刷者　加藤俊三
發行所　秋田市上中嶋本町十五　秋田郷土會　振替仙臺二三九八番
印刷所　秋田市西根小屋町十五　秋田郷土會印刷部
第44號　内の參百部

終